恋愛しよう

青木弘樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
恋愛しよう

【Ｎコード】
Ｎ８１８３Ｋ

【作者名】
青木弘樹

【あらすじ】
恋愛に縁のない寂しい人生を送っている主人公、堤たけし。
勤めていた会社も潰れてしまって、現在フリーター。
さまざまな出会いはあるものの、なかなかうまくはいかない。果たして最終的に彼は幸せを手にすることは出来るだろうか…。

作：青木弘樹

堤たけし・３０歳…主人公。
竹内まなぶ・２８歳…ある場所で知り合う。男前。
さとみ・２６歳…まなぶの彼女。
松浦けいこ・２５歳…まなぶの友人。
相沢ようこ・３０歳…たけしの同級生。
朝倉ゆみ・１８歳…高校生。
村上・３０歳…たけしの同級生。
その他・多数
（誤字、脱字、あるかと思います。ご了承ください）

「はあ…」
ここはとある喫茶店。男がひとり、コーヒーを飲んでいた。
今流行のスターバックスみたいなお洒落なところじゃない。昔ながらの喫茶店だ。
ウエイトレスは店主の妻と思われる５０歳くらいの女性。店主は寡黙だが、二人とも人当たりはよかった。経営はぼちぼちのようだ。
「はあ…なんにもいいことねえな…」
男はポツリとつぶやいた。
男はフリーターだった。三年前、働いていた工場がつぶれ、以来、別の工場でフリーター。父親と二人暮らし。
毎日、小言を言われ、めんどくさいから一人暮らししたいが、稼ぎがない。
そのうち仕事を探すのもやめてしまった。
数ヶ月に一回くらいは職安に行くものの、結局手ぶらで返ってく

る。そんな日々が続いていた。
男の名前は堤たけし。３０歳。

夜。たけしはめったに行かないパチンコに行き、暇をつぶした。
「…」
結局いつもどおり負けたようだった。しかしたけしはギャンブルには熱くならないタイプなので負けは5千円ほどで済んだ。
その帰り。近所のコンビニに寄ったたけしは、妙な衝動にかられた。
「…」
客がひとりもいない。店員もいない。おそらく店員は奥にいるのだろう。
「…」
たけしは何を思ったかガムを上着のポケットに入れた。そして、そそくさとその場を去ろうとした。その時、
”ドン”
ちょうど店に入ってきた客と肩がぶつかった。そのひょうしにガムが落ちてしまった。
たけしは慌ててガムを拾い、足早に外に出た。
「…」
足早にその場を去ろうとするたけし。しかし、
「ちょっとあんた」
さっきの客が話しかけてきた。
「あんた、まさか…」
その男はたけしをじっと見た。
「すいません」
たけしは走った。
「ちょっと！」
男はなんと追いかけてきた。
数十メートル行った先で、男はたけしに追いついた。そしてたけ

しの肩に手をかけた。
「ちょっと待ちなよ、あんた…はあはあ…あんた、まさか万引きじゃないだろうな？」
「…」
たけしは黙っていた。
「なあ、どうなんだ？」
「べ、別にあんたに関係ないだろ！？」
たけしはやや逆ギレした。
「いいや、関係あるね。あの店は知り合いが働いてんだ。見過ごすわけにはいかないね」
「…」
たけしはおもむろにガムを取り出した。
「わかったよ…」
「？」
「ほら、あんたの言うとおり万引きさ。警察でも何でも呼べばいいだろ？」
たけしはもうどうでもよくなっていた。
「…」
男は少したけしをにらんでいた。たけしは横を向いていた。
「ったく…」
男はたけしからガムを取り上げた。
「あんたさあ…そういう問題じゃないだろう？」
「…」
「警察呼べば済む問題じゃないだろう？」
「…」
「俺も昔、自暴自棄になった時期もあったけど…見たところまだ若いんだし、もっと前向きに…」
「うるさいな！」
たけしは怒った。
「！？」

「もういいんだよ。どうせ俺なんて一生結婚も出来ないし…もういいんだよ！」
「…」
二人はしばらく黙っていた。
「なあ…」
男が話し出した。
「あんたに何があったか知らないけどさ、俺の友人の話をちょっとしてやるよ」
「…」
「去年、結婚したんだけどな、あ、今年２８になるんだけど…そいつはまあ、顔がブサイクなわけさ、ぶっちゃけ。２０歳くらいまでぜんぜんもてなくて、彼女もいなくて、でもある日、このままじゃ駄目だと一念発起したわけさ」
「…」
「仕事が休みの日は、街へ出てナンパ。とにかく声をかけまくった。何十人、それこそ何百人って言ってたな、トータルで」
「…」
「最初のうちは無視されたり、気持ち悪がられたりしてたんだけど、そのうち、どんな人に、どんな風に声をかければいいか、コツをつかんでいったらしい。それで、どんどん女性の扱いがうまくなり、今じゃ新垣結衣似の奥さんと幸せに暮らしてるってわけさ」
「…」
たけしはうつむいて聞いていた。
「つまり努力しだいで、どうにでもなるってことさ。あんたまだ若いんだろう？いくつだい？」
「…３０」
「３０か…。けど見た目は２５くらいだな。それにブサイクじゃないし。もっと前向きにさ、努力しようぜ」
男は優しく語りかけた。
「…」

しばらくして、たけしも話し出した。
「その人は、仕事は何を？」
「ん？どっかの浄水場って言ってたな」
「なんだ…公務員か。だから結婚できたんだよ。男の場合、結婚は顔じゃないからな」
「それは…」
「あんたは仕事は？」
「俺？俺は…実は三年ほど前に働いていた工場がつぶれちまって、いまパチンコ屋でフリーターだよ」
「三年前？」
たけしは思った。自分と同じだ。まさか同じ職場か？
「まさか…トヨトミ科学じゃないよな？」
「え？な、なんで分かったんだ？」
「俺も…三年前まで働いてたんだよ」
「ほんとに？西工場かい？」
「いや、俺は東工場だ」
「なんだ！仲間じゃん！そうだったんだ」
男は笑顔になった。たけしも何となく親近感を抱いた。
「で、今は何やってんだ？」
「今は、誰も知らない小さな町工場でフリーターさ」
「へえ、そうか。お互い大変だよな。けどさ、じゃあ言ってみれば同じような境遇じゃん。お互い頑張ろうぜ」
「…」
たけしはそれでも暗い表情だった。
「俺は竹内まなぶってんだ。あんたは？」
「俺は…堤たけし」
「そうか。まあいろいろあるけどさ、頑張ろうぜ、たけしさん」
「…」
「どうしたんだい？」
「君はいいよな」

「え？」
「君は男前だから、フリーターでも、いや…おそらく無職でも、もてるだろう？」
「…」
たけしの言うとおり、まなぶはかなり男前だった。ジャニーズにいてもおかしくないくらい。
「俺も君くらい男前だったら、ナンパでもして、あるいは合コンでもいって、てきとうに彼女作るさ」
「…」
「君、彼女いるだろ？」
「え？まあ、いるけど…」
「ほらね。結局、顔がいいか、いいところに勤めてるか、それがすべてさ」
「いや、そんなことは…」
「だったら、女、紹介してくれよ。君ならいるだろ？女の知り合いなんてたくさん」
「それは…そんなこと言ったって…初対面だし」
「分かった」
たけしはペンとメモを取り出した。そして何かを書いた。
「これ、俺の携帯の番号とメールアドレスだ。誰か紹介できる女がいるなら紹介してくれよ。別にうまくいかなくったって、文句は言わないからさ」
「いや、でも…」
「君が言ったんだぜ。前向きになれって。だから俺は今、ここで会ったのも何かの縁だと考えて、連絡先を教えたんだ」
「…」
たけしの言うことは一理あった。
「あとこれガムの代金」
そう言うとたけしは５００円玉を差し出した。
「余った金は、詫び代だ。コーヒーでも買ってくれ」

「…」
まなぶは一応、メモとお金を受け取った。
「じゃあな、同僚。いい返事を期待してるぜ」
たけしは去っていった。
「…」
まなぶはたけしの勢いに気圧されていたが、ふと我に返った。
「何だよ…あいつ…」
しかしたけしの言い分には反論できないところもあった。
たけしはと言うと、本当は連絡など期待していなかった。勢いあまって仕掛けたことだった。
まなぶはガムをそっと店に戻し、言われたとおりコーヒーを買って帰っていった。もちろんコーヒーは元々買うつもりだっただけだが。

次の日。
たけしは仕事の帰り、職場の近くのコンビニに寄っていた。
ガムと漫画を買い、車に乗り込むたけし。車は古いセダンタイプ。父と共用している。ガムを食べながら、車内で少し漫画を読んでいた。数分して帰ろうとしたとき、
”コンコン”
誰かが運転席の窓をたたいた。
「？」
たけしが見ると、かわいい感じの女子高生が立っていた。たけしは窓を開けた。
「なんですか？」
知り合いかと思ったが、この歳で女子高生の知り合いなどいない。
「あ、あの…」
女子高生は何か困っているようだった。
「…？」
「あの…実は…」

彼女の話はこうだった。名前は朝倉ゆみ。
学校の帰り、友達とカラオケに行ったゆみは、ここで皆と別れた。家は事情があっておばあちゃんと二人暮らしなのだが、当初、おばあちゃんが車で迎えに来てくれるはずだったのだが、おばあちゃんはどうやら体調を悪くしたらしく、来れなくなったらしい。
そして財布を見たところ、ついたくさん使ってしまっていたらしく、バスに乗れるほどのお金もないらしい。
家まで歩いたら４０分くらいかかるので、家の近くまで送ってくれないか、とのことだった。
「なるほど…」
「すいません…突然…」
「いや、それはいいけど…」
たけしは内心ラッキーだと思っていた。もちろん変なことをするつもりなどない。
「けど…そういうことならあまり男に話しかけないほうがいいよ」
「はい…でも、あなたなら大丈夫かなって思って…」
「…」
たけしは微妙な気分だった。それは紳士的に見えたということなのか、それとも、なめられているのか。まあ、どっちでもいい。男はかわいい女には弱いものだ。
「じゃあ、乗って」
「いいんですか？ありがとうございます」
ゆみは助手席に乗り込んだ。
たけしは、だいたいの場所を聞き、家へと向かった。正確には家から一番近いコンビニに降ろしてほしいとのことだったので、そのコンビニに向かった。

車内。
「けど考えたらさ、まだバスあるし、お金渡せばよかったね」
たけしが言った。

「え？そ、そうですね…」
「ちなみに実際いくら入ってるの？財布に」
「えっと…１８０円です」
「ははは、使いすぎだよ」
「そうですね。すいません」
「ところでその制服かわいいね。どこの高校？」
「え？えと…北高校です」
「へえ、俺らの時代とは違うね」
「北高校だったんですか？」
「いや、俺は南高校だったんだけど、一応、他校の制服は知ってるよ」
「そうですか」
「それにしてもさあ、最近みんなスカート短いよね。嫌じゃないの？」
「え？まあ…みんな短いし…」
「いや、まあ男としてはいいんだけどさ、自転車とか乗ってたら見えるでしょ？正直」
「そ、そうかもしれませんね」
「最近の若い子は、大胆だね」
「…」
ゆみは少し不安げだった。
「いや別にやらしい目で君を見てるわけじゃないよ」
「…」
「大丈夫だよ。ちゃんと送るから。変なことはしないよ」
「はい…」
「彼氏はいないの？」
「はい、いません」
「ほんとに？君かわいいのに」
「いえ、そんなことは…」
「もうちょっと若かったら、俺もアタックするのになあ」

「え？けどたけしさんは２５くらいなんじゃ…」
「いやいや、もう３０だよ。半分おっさんさ」
「そうなんですか？見た目すごく若いですよ」
「そうかな…」
「はい。全然おじさんじゃないですよ」
「ありがとう。けど気力がね。カラオケとか行きたいとも思わないし」
「そうですか。カラオケ楽しいですよ？」
「若いときはよく行ったけどね」
「最近、毎週いってます。歌うの好きだから」
「いいね。一度聴いてみたいもんだ。君の歌声」
たわいない世間話をしているうち、車は目的の場所に着いた。
「はい、おつかれさん」
「ありがとございます」
「いえいえ、楽しかったよ。若い子と話をするのは久しぶりだったしね」
「あの…」
「ん？」
「今度…お礼をしたいので、連絡先、教えてもらってもいいですか？」
「え？い、いいけど…別にお礼なんていらないよ」
「いえ、そういうわけにはいきません」
「そ、そう？じゃあ…」
たけしは携帯の番号とメールアドレスを書き、ゆみに渡した。
「本当にありがとうございました。時間のあるときに連絡しますね」
「あ、ああ…」
「じゃあ失礼します」
「うん。気をつけて」
ゆみは頭を下げ、歩いていった。
「…」

たけしは内心うかれていた。しかし連絡がこないような気もしていた。
ホステスなんかも、平気で嘘をつく。女子高生とホステスを一緒にするのは少しおかしいが、似たようなもんだろうと考えていた。どちらも同じ人間、同じ女だ。
淡い期待を胸に、たけしは自宅へと帰っていった。

数日が過ぎた。
まなぶからも、ゆみからも、連絡は来ていない。
「結局みんな口だけだな…」
部屋でゴロゴロしているたけし。その時、携帯が鳴った。
「！？」
たけしは慌てて電話に出た。
「もしもし」
「あ、たけし君？久しぶり」
「？」
「覚えてるかなあ？中学のとき一緒だった相沢ようこですけど」
「相沢…さん…？」
相沢ようこ。たしか中学2年と3年のとき同じクラスだった女性だ。そんなに話をしたことはないが、なかなかかわいい子でクラスでも人気のある子だった。
「ああ、覚えてるよ。久しぶりだね」
たけしはびっくりしていた。プライベートで会ったことなどないからだ。
「いきなりごめんね」
「いや、いいんだけど…どうしたの？」
「うん。実は今度、同窓会をする予定なの。中3の時のメンバーで」
「そうなの？」
「それで、私が幹事することになっちゃって、それで電話したの」
「ふ～ん…」

「それでね、明後日ちょっと会えないかな？」
「明後日？」
「夜遅くでもいいから、駅裏のロイヤルレストラン（いわゆるファミレス）で」
「明後日か…」
「だめかな？」
「うん。いいよ。大丈夫」
「ほんとに？ありがとう」
「そうか。同窓会か。みんな来そうかな？」
「どうだろう？一応、連絡先の分かる子には連絡してるけど…」
「あ、でも、何で俺の携帯の番号知ってるの？」
「え？ああ…村上君に聞いたの」
「村上…ああ、あいつか」
「ごめんね、勝手に電話して」
「いや、別にいいさ」
「それじゃあ夜９時にロイヤルレストランで、待ってるね」
「オッケイ」
「それじゃあね」
電話は切れた。
「相沢さんか…」
たけしは内心うれしかった。
しかし、よく考えたらこの電話はおかしかった。そんなに親しくない相沢からの電話。そして何のために会うのか？会う必要などないはずなのに…。
だがたけしはそんなことは考えなかった。相沢さんに会いたかったからだ。
人はテンションが上がると、物事を深く考えなくなる。
これは罠だった。しかし、たけしはそんなことは、今は知る由もなかった…。

☆その２へ続く

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8183k/

恋愛しよう

2010年10月8日15時05分発行